



東京修道院に来てから3週間、毎日がゆっくりと流れていく。月一回、信徒の方が参加して、この修道院で行われるミサと昼食会、みんなが楽しみにしているものを初めて体験する。それは、やっと入りきれるような聖堂でミサがあり、その後、わいわいと食事をす。唯、それだけおいしい季節の彩をモチーフにしたシスターの温かい手料理ともてなしで参加者はすっかり癒されて、しあわせをかみしめて帰ってゆく。人の「食」は温かなものに出会うとき心も共に元気になるものだ。森のイスキアを運営される佐藤さんがなさっている事と同じだと思った。毎回当日、その時間まで何人参加するかわからないのに準備しているがいつも丁度だそう。初めてのわたしは非常に不安だったけれど見事に丁度なのである。経験している2人のシスターは涼しい顔をして準備している。みんな神さまの手の中にいて何も心配はしていない。この参加者の中に、信徒でない方が一人おられた。勿論、初めての参加なのである。ミサの最後の讃美歌を歌っているとき、涙をこぼしておられた。「いつも喜んでいなさい」の歌である。何の涙かと思っていたら、後で話してくださった。つらい3年間を過ごして来たことを思い出し、今のしあわせを感謝していた。「主はその人が背負いきれない十字架はくださらない」との御言葉が日々の支えだった。そうして今がある。本当に感謝だったから涙があふれた。と涙の説明をしてくださった。そうして、先に述べたおいしい食事で一層の癒しを体験したのである。ちなみにおいしいメニューは次のように。

ピンクの桜飯 おはぎ（上に桜の花や菜の花が載せてある）お煮しめ（宮崎産の野菜筍やふき、高野豆腐、鶏肉などが入っている）サラダは新鮮な野菜、上に土筆と菜の花がのっている、飲み物は桜色のカクテル、ワイングラスにピンクの淡いソフトな色合いを見せていた。そしてスープはおふくろの味のする豆腐と菜の花の味噌汁。この日のもてなしのテーマはさくらだった。

後片付けはみなであっとゆう間に終わった。これも、楽しいひと時なのである。次の5月聖母月のミサを楽しみに記念写真を撮り散開となる。